日本語教育現代思想史の研究
―中国において日本の国語教育と文学思想が果たした役割―

田　中　祐　輔
早稲田大学国際学術院　助手
（現　東洋大学国際センター　専任講師）

緒　　言

1.　中国の大学専攻日本語教育と日本の国語教育との関わりと文学思想

国際交流基金が行った調査によると、海外の日本語学習者数は2012年時点で約399万人に達している。中でも中国の学習者数は約105万人で最多とされている。中国の日本語教育は、その教育機関と対象によって正規の学校教育、社会人向けの成人教育、日本語学校、企業の日本語教育などに分けられるが[1)]、特に、高等教育機関で学ぶ学習者が多く、中国の学習者全体の約65％となっており、また世界の高等教育機関で学ぶ学習者全体の過半数が中国の学習者となっている[2)]。本研究の主な対象は中国の高等教育機関における日本語教育のうち、大学に設けられた日本語学科の学生への日本語教育である。

世界の日本語教育を牽引する立場にあると言える中国の大学専攻日本語教育は、海外における日本語普及をはじめとする「日本理解」推進事業にも重要な示唆を与えるものであり、さまざまな角度から注目され、近年では、中国の大学専攻日本語教育と日本の国語教育が、文法教育[3)]、教科書の内容[4–6)]といった側面において密接な関わり合いを持つことを指摘する先行研究も現れている。また、こうした教育の実践に一定の役割を果たした存在の一つに、日本から派遣された国語科教諭たちが指摘できるが、その実践内容、果たした役割、現場で生じた課題についても明らかにされている[7)]。また、この背景には、文学を重視する教育思想が存在することが明らかにされている[8)]。

2.　国語教育の内容や手法、文学教育への批判

一方で、こうした状況に対し「国語教育」と「日本語教育」とは異なるという前提に基づいた疑問や批判もあった。日本から派遣された教師についても、国語教育を専門とする教師に対しては「国語を教えるのではなく、中国人に日本語を教えるのであるから、やはり最適ではない。」[9)]とされ、森田[10)]は、「日本語教育」と「国語教育」とでは教える内容や方法が異なるという理由から、中国における日本の高等学校国語科教諭受け入れは、教育現場から歓迎されていないのが実情であると記している。

さらに、第二言語としての日本語の教育には文学教育は必ずしも適切ではないという指摘もなされた。例えば、日本の代表的な近代文学作品が中心に取り扱われる読解の授業について、そもそも文学史を学ぶことが目的ではないため、日本の近代を代表する文学作品だけに特化して取り扱う必然性はないという指摘[11)]や、教科書の題材が小説などの文学作品に偏りが見られる点については、文学史の授業のためであればともかく、日本語教育のための教科書であれば、掲載文章のバランスを考えなければならない[12)]という指摘などである。

3.　現行教育構築に際し日本の国語教育と文学思想が果たした役割の解明

しかしながら、先に述べたように、こうした指摘がありながらも、現行教育と国語教育との関係は確かに存在し、それを裏付ける考えの一つには文学教育重視の考えがある。そして、そうした教育を実施するにあたって、日本の国語科教諭が果たした役割が少なくないことが今日明らかにされているのである。

では、どのようにして、中国において文学重視の教育思想は国語教育と結びつき、具体的な教育内容や手法に具現化されたのであろうか。それは誰が担い、どのように考え、進められたのであろうか。幾度もの逆風に堪えながら戦後中国の大学専攻日本語教育において実施され、中国の人々の「日本理解」を支えた、言わば「もう一つの国語教育」の実態解明が求められると筆者は考える。本研究では、そのための一つの取り組みとなる日本

語教育現代思想史の研究として、現行教育構築に際し日本の国語教育と文学思想が果たした役割を明らかにすることを目的とする。

結　　果

そのためには過去から現在にかけた通時的研究が求められると言える。本研究では、現行教育の内容や手法が確立されたとされ、国語教育の内容や手法を用いた教育もある程度の形が定まり実施されていた1970年代末から1990年代[1]に活躍した教師に分析の焦点を当て、文学教育を重視する思想が、具体的な教育内容・手法に体現される際に、どのように日本の国語教育と結びついていったかについて調査を行った。

1.　収集した史資料と聞き取り調査

実施した対人調査は合計41回（インタビュー調査：合計37回・資料に関する調査：合計4回）である。また、収集した主な資料は文献計31点、教科書26点、教師が教育内容や手法について記した書簡141通、写真資料83点、映像資料1点である。

調査は主に次の3つの段階で進めた。第一に、国語教育を用いた教育が大規模に普及した経緯について、中国の日本語教育の「展開期」に日本語教育に関わった人々への聞き取り、資料収集を行い考察した。第二に、そうした流れの中で教育内容と手法確立は、誰が担い、どのように考えられ、どういった形で進められたのかについて関係者へのインタビュー調査を行った。第三に、以上から浮かび上がる教師や関係者へのインタビュー調査、それぞれが著した教科書や論考、書簡の分析を行った。本研究報告では、その中でも1970年代末から1980年代初頭にかけ、教育内容や手法の確立に際し最も中心的な役割を果たした教師の一人である石川一成氏[2]について報告する[3]。

2.　石川一成氏[4]（1929～1984）

石川氏は、神奈川県教育委員会による中国日本語教師派遣事業の第一期として四川外国語学院に派遣された。現在は公募で派遣教師が募集されている本事業であるが、当時人選にあたった教育委員会の選考委員は「何かにつけて凄い頭もいいし、勉強もする。立派な人なんだよ、人物的にもね。歌人だしね。素晴らしい人。この人がいいよって。結局ズバリいって」（2014年2月1日インタビュー調査）と言うように、当時神奈川県立教育センター国語研究室に勤務していた石川氏を、事業の主旨や理念を実現する適任者として指名し中国大使館に推薦した[5]。石川氏の教育と研究は、中国の日本語教育、ひいては中国における日本理解に多大な影響を与えたと評価され、没後製作された追悼番組では魯迅の恩師である藤野厳九郎氏に例えられている（「中国にとって、石川先生は藤野先生と同じく偉大な存在である。我々は永遠に彼の名を忘れることはないだろう。」[6]（重慶電視台、1985））。

石川氏が赴任した四川外国語学院の日本語学科は開設4年目であったが、カリキュラムも未整備で、現地教員と共に、一から教育内容や手法を築き上げ、特に国語

1　筆者が指摘したように[13]、現代中国の日本語教育と国語教育との関わりについて、言葉や文化の規範性は文学に内在するという考えは建国直後の日本語教育現場にすでに存在しており、そうした考えを実現するための教育が、戦前に日本の国語・国語教育を学んだ人々によって試みられていたが、現在の規模や内容により近い形に確立されたのは1970年代末から1980年代と言える。

2　石川氏に関する先行研究は少なく、研究の必要性が指摘されている[14]。王[15, 16]、加古[17]では中国において献身的に教育に従事し、現地の学生や日中交流に尽力した実績が論じられている。また、先に述べたように、石川氏が輪禍に没した際は重慶電視台[18]が追悼番組を放送している。これらは石川氏の功績を知るうえで貴重かつ重要である。しかし、本研究が着目する、教育内容や手法の確立や文学思想と国語教育との関わり合いに関する石川氏の取り組みについては管見の限り一切取り扱われていない。王（2008）が「日本教師派遣事業が日本文化史の表舞台で語られることが少ないのは、アジアに対して関心が薄いと映るのではないか。（中略）日本教師派遣事業から、日本がもっと教訓をくみ取り、その知恵と経験を整理し、伝えていく意味があろうと思われる。」（p. 15）と述べるように、教育の内容や手法を確立するにいたった経緯や具体的な取り組みについてはいまだ明らかにされていないのである。中国の日本語教育、中国における日本理解に果たした役割の実態に焦点を当てて分析する必要がある。

3　石川氏はすでに他界されているが、調査結果の公開についてご家族からの許諾を得た（2014.1.26）。

4　1929年千葉県佐原市生まれ。東京文理科大学文学科漢文学専攻卒業後、神奈川県立藤沢高等学校、湘南高等学校を経て、神奈川県立教育センター国語研究室在職中に神奈川県教育委員会によって中国四川省重慶市四川外語学院に派遣された（1979～1981）。帰国後、神奈川県立厚木高等学校教頭を務めながら、神奈川の日中友好事業に尽力したが、1984年10月23日に不慮の輪禍により急逝（享年55）。著書・論文多数、歌集『沈黙の火』により神奈川県歌人会第四回神奈川県歌人会賞受賞。短歌活動の指導の功績に対し、藤沢市長より表彰される。現代歌人協会会員、日本歌人クラブ幹事、日本国語教育学会理事も務めた。

5　他に3名の国語科教諭が選考され、第一期派遣組は4名となったが、石川は最も年長であり、統括責任者を務めた。

6　中国語原文引用：石川先生的性格也如同藤野先生一樣是偉大的。雖然他的姓名並不為許多人所知道、但我想凡是知道他的人都永不會忘記他的名字。

科教諭による教育の枠組み構築に重要な貢献を果たした。その活動詳細と、プロセスは紙幅の都合上全てを掲載することは不可能であるため、以下に、現行教育構築に際し日本の国語教育と文学思想が果たした役割という観点からその概略を述べる。

3. 日本語教育の環境整備―文学作品の拡充―

石川氏がまず取り組んだのは、他でもない日本語教育の環境整備であった。石川氏の派遣地である重慶には、日本人の長期滞在者が石川氏の他にいないという状況であり、日本語学習者が容易に利用できる日本の資料や文献も皆無であった。そのため、学生達が日本の文物、特に文学作品に触れられるよう、派遣前に神田の古書店に足を運び、大量の書籍や辞書類を購入し発送した。また、企業や機関に対し協力や寄付を呼びかけ、その熱心な活動に共鳴した会社や団体、個人が中国の日本語学習者のために機材や書籍、テープ等の寄付を申し出た（書簡資料1979.04.18）。また、神奈川県にも掛け合い、1979年9月の神奈川県議会では補正予算として総額300万円分の図書寄贈が可決され後日寄付された。県からの図書寄贈はその後も継続され、各地域の大学に日本の文学作品を中心とした図書が拡充された。教科書出版社に国語教科書と便覧の寄付を依頼し、中国現地でも日本の高校生が受講するような国語教育の内容や手法を用いた教育が受けられる環境整備に尽力した。こうした図書や教材寄贈のモデルは、他の行政府や民間団体の対中国事業の手本とされ、結果的に中国における日本関係の図書の拡充や整備に寄与することとなった。

4. 先駆けとなった教育実践―教育内容・方法・カリキュラムの確立―

石川氏が派遣された当時、他の自治体や民間団体からの派遣事例が現在ほど多くなく、また、教育内容や手法そのものも、日本語教育へのニーズの変化から模索されている状況であった。そのため、石川氏は現地教員から協働で教育内容や手法の確立を行うことを依頼され取り組んだ。自らが体験したことのない「第二言語としての日本語の教育」を行うに際して各界の専門家に多くを学び[7]、そのうえで、石川氏が現地で最も心を砕いたのは、文学教育であった。日本人が国語として日本語を学ぶ手法をベースに、文学作品を精読するスタイルで実践し、当時の学生達が日本語そのものだけでなく、日本文化や日本社会も深く学ぶことのできる場を提供した。学習者に適した教授法の開発にも熱心で、学習者の母語（この場合、四川方言）の影響が日本語習得に与える影響を独自の手法で調査し、体系をまとめている（書簡資料：1980.04.19）。日本から持参した教材では不十分な事項は、学生向けのガリ版教材を作成した。石川氏は国語教育の内容や手法を日本語教育で用いることへの批判についても把握したうえで、むしろ中国の文学を重視する教育には国語教育の内容や手法をベースにした教育が適していることを記している（書簡資料：1979.04.15）。こうして徐々に形成された教育内容や手法は、中国各地の教員と共有され、教師研修を通して普及してゆくこととなる。また、自身も日本から派遣される教師の研修や、中国の学生や教師を日本に招いて行われる研修[8]の設置と実施に積極的に取り組んだ。

5. 裏付けとしての文学的素養

石川氏が短期間に様々な教育実践を立ち上げ普及させることができた要因の一つは、自身の専門性にある。現代文や古文、和歌・漢文教育に造詣が深く、実践と研究の両輪で教育に取り組む下地が派遣以前に育まれていた。詳細は紙幅の都合上割愛するが、石川氏が大学卒業後に発表した論文・随筆は36本、雑誌連載3本、書籍3冊となっている。研究分野も多岐にわたり、国語教育、日本語教育、短歌、俳句、漢文、文学全般、教育全般、中国文化、中国古典文学、旅行記録、等について著している。これらと中国での日本語教育実践の具体的教育内容・手法との関わりについて現在分析を行っている最中である。こうした教育と研究は現地で高く評価され、勤務先大学が初めて大学院を設置する際は日本人初の顧問として参加を求められ、院生の入試やカリキュラム開発にも参画している。

[7] 日本語教育関連資料の収集、日本語教育用教材の収集、国立国語研究所の所属研究者から受けた研修は、石川氏のように国語教育を専門とする他の専門家の研修モデルと重要な資料となった。

[8] 神奈川県が日本語教師を派遣している中国の大学の日本語教師および日本語教師を志望する者を、中国における日本語教育の振興を図るため、短期研修生として招聘する事業。県内の教育機関において研修および聴講を行うとともに、双方の教育事情等の理解を深め、日中両国の友好親善の促進と学術・文化の発展に寄与することが目的とされた（収集資料「中国短期研修生受人事業等について」）。17年間実施され、161名が研修を受けた。

考　　察

以上、幾度もの逆風に堪えながら現代中国の大学専攻日本語教育において実施され、中国の人々の「日本理解」を支えた「もう一つの国語教育」の実態解明のための一つの取り組みとして、本研究では、日本語教育現代思想史の研究として現行教育構築に際し日本の国語教育と文学思想が果たした役割を明らかにすることを目的に調査と考察を行った。

結果、1970年代末から1980年代に中国の大学専攻日本語教育に従事した教師達が中国の文学重視の教育思想を教育内容と手法へ具現化する過程において多大なる功績を残したことが判明した。本報告では、その中の一人である石川一成氏が現地教師や行政府と連携を取りながら行った教育内容・手法の確立と教育環境の整備について概略を述べた。今後、調査で得られた知見を取りまとめ、順次学術誌に公開してゆく予定である。

要　　約

本研究は、日本の国語教育との関わりが指摘されている中国の大学専攻日本語教育について、現行教育の内容と手法の構築に際し日本の国語教育と文学思想が果たした役割の解明をテーマに調査と考察を行った。聞き取り調査と資料調査、既存資料の分析を通し、日本の国語教育との関わりが見られる教育内容と手法の枠組みが構築されたとされる1970年代末から1980年代前半に重要な役割を果たした教師の存在を特定し、それらの教師の教育実践と普及過程、背景となった考えと経験などについて分析を行った。

謝　　辞

本研究の遂行に当たり公益財団法人三島海雲記念財団より学術奨励金のご支援を賜りました。貴重な研究環境と機会を与えていただきましたこと、同財団の皆様に深く感謝申し上げます。

文　　献

1) 劉　志明：国際協力論集，**4**(1), 137–154, 1996.
2) 国際交流基金：海外の日本語教育の現状　2012年度日本語教育機関調査より，凡人社，2013.
3) 彭　广陆：日语教学与教材创新研究―日语专业基础课程综合研究―(曹大峰編)，pp. 82–97，高等教育出版社，2006.
4) 篠崎摂子：日语教学与教材创新研究―日语专业基础课程综合研究―(曹大峰編)，pp. 151–156，高等教育出版社，2006.
5) 田中祐輔：リテラシーズ，**10**, 21–30, 2012.
6) 田中祐輔：国語教育史研究，**13**, 11–18, 2012.
7) 田中祐輔：国語科教育，**74**, 22–29, 2013.
8) 田中祐輔：言語文化教育研究，**11**, 70–94, 2013.
9) 蘇　徳昌：日本語教育，**41**, 25–38, 1980.
10) 森田良行：日本語教育，**50**, 89–96, 1983.
11) 裴　崢：小樽商科大学人文研究，**85**, 259–274, 1993.
12) 陳　岩：中国日语教学研究文集7（胡　振平編），pp. 199–212，香港迅通出版社，1998.
13) 田中祐輔ほか：2013年度日本語教育学会春季大会パネルセッション，2013.
14) 王　敏：国際日本学とは何か？　日中文化の交差点，三和書籍，2008.
15) 王　敏：朝日新聞，12版，11, 2005.
16) 王　敏：遠近，**9**, 10–12, 2006.
17) 加古陽治：東京新聞，2013.06.19夕刊，5, 2013.
18) 重慶電視台：我們不会忘記他的名字―記日本友人石川一成先生―，1985.